

セント・ルカ産婦人科
30周年によせて



福島県立医科大学副学長
慶應義塾大学名誉教授

吉村 泰典

セント・ルカ産婦人科30周年によせて

セント・ルカ産婦人科が創立30周年をお迎えになりましたこと、心よりお祝い申し上げます。宇津宮院長には、公私にわたり格別なご親交を賜り、実に多くのご指導をいただいております。わが国の生殖医療の黎明期より、先導者のお一人として生殖医療・医学の発展に貢献されてこられました。いかなる場面においても、いかなる機においても正鵠を射るような鋭い指摘は、わが国の生殖医療の将来を憶う一途な誠実さによるものと常々感服いたしております。長年にわたり、ともにわが国の生殖医療の発展に汗水流し、文字通り肝胆相照らす仲でありましたので、貴院の30周年には感慨深いものがあります。

還暦を過ぎてからの大分駅前クリニックを新設移転のお話をお聞きした時、驚愕したことを追懐しております。しかし、早いもので大分駅前クリニックを新築移転して10年以上が経過しました。その時「私の理想とするクリニックの誕生です」とおっしゃった言葉は今も深く深く脳裏に刻まれています。まさしく、畢生の大事業でしたね。世の中が激しく移り変わる時代にあっても、荒波に吞まれることなく、クリニックを教導されてきました。先生の専心理想の実現に邁進しようとする精神は、一貫性をもった揺るぎのないものであり、わが国の生殖医療の役割を果たす主導的な精良なクリニックとして発展を遂げてきております。お二人のご息女が先生の御意思を見事に継承されており、羨ましい限りです。

2022年4月より、40年もの永きに渡り自由診療で実施されてきた生殖補助医療が公的医療保険の適用対象になり、令和に入りわが国の生殖医療は新局面を迎えています。今から20年以上も前、不妊治療の保険化に向けて、堅忍不拔の意気でもって奮励されていたのを想起するにつれ、先生の御慧眼に恐れ入ると同時に、物事の本質を見据え、常に趣旨を体した行動に感服いたしております。

先生の情熱は、次なる目標に向ってあらゆる事柄を誠実かつ着実に遂行されると思いますが、お互い疾うに古希を過ぎました。継嗣に全てを託する時期です。先生のこれまでの来し方を具に目撃してきたものとして、暫く翼を戢め、虚心坦懐に自己を見つめ直されたいかがでしょう。

貴院のさらなる発展を祈りつつ、開設30周年に寄せて、管鮑の交わりに感謝し聊か感慨の一端を記す。



大分大学 名誉教授
宮川 勇生

御開院30周年、おめでとうございます

宇津宮 隆史 先生から、『開院30周年になります』とのお知らせを受け取りました。「えっ、もう開院されて、30年に…」。そうでした。1992年6月3日に、大分市津守に、『医療法人 セント・ルカ セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所』を開院されました。あの年から30年です。そして、2011年7月1日に大分駅のすぐ近くの現在地に移転、新築開院されました。“光陰矢の如し”を実感しています。

当時、産婦人科を開業される先生で「研究所」の名称を用いたり、付設される先生を知りませんでした。先生は九州大学温泉治療研究所・産婦人科（その後、九州大学生体防御医学研究所、九州大学別府病院と名称変更）で研究をされてきましたので、研究が好きで、きっと一生研究を続けたかったのでしょうか。その通り、診療成績は言うに及ばず、生殖医療に関する優れた臨床的、基礎的研究を発表されてきました。先生から送られてくるその年ごとの「年報」、そして5年ごとの「開院記念誌」には臨床統計、院内セミナー、セント・ルカセミナー（開院記念講演会）、国内そして国際学会での発表、論文などの業績とともに、知人やスタッフの代表者の寄稿、海外の学会での写真、先生の趣味である登山やスキューバ・ダイビングでの海の美しい写真、そして私達まで毎年招待していただくお花見会や忘年会の楽しい写真など、数々の思い出が記録されています。すばらしい内容です。これらの「開院記念誌」からは、『医療法人 セント・ルカ セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所』を牽引されてきた先生の生殖医療に対する弛みない努力、向上心の軌跡を改めて感じ取ることが出来ます。これは、開院当初から事務部門にしっかりした情報処理室を設置されていて、なかでも臨床成績、研究業績の向上を記録に残されてきたことによります。

先生の人生は、『人間愛』に満ちています。不妊に悩んで来院される患者さんに、最新のそして最良の生殖医療・治療を提供することは当然のことですが、不妊患者さんへの初期教育から、諸事情によって治療を諦めねばならなくなった患者さんに対して、公認心理師／生殖心理カウンセラーを交えた心のケアの懇談会をも、開院当初から主催されています。また、これまで高額不妊治療の患者さんには、国から、地域から「不妊治療助成金制度」の恩恵がありました。これは、患者さんの経済的負担を軽減するため、何度も国会に請願された先生の活動の結果であったことを知っています。

さらに、スタッフに対する教育・育成は、大学院での研究を勧め、援助し、研究心を醸成、医学博士、工学博士に育成されてこられました。現在、研究室には博士号を授与された3名をリーダーにして、新たな研究成果を積み重ねています。さらに、医師の宇津宮 隆史 先生、伊東 裕子 先生、津野 晃寿 先生、甲斐 由布子 先生の医学博士4名を加えると、スタッフの博士の総数7名と、充実した研究メンバーです。

また、日本産科婦人科学会専門医 4名、日本産科婦人科学会指導医 2名、日本生殖医学会生殖医療専門医

4名、日本内視鏡外科学会技術認定医 1名、日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医 1名、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医 1名、日本卵子学会および日本生殖医学会認定生殖補助医療管理胚培養士 2名、日本卵子学会生殖補助医療胚培養士 3名、日本生殖心理学会認定生殖医療相談士 7名、日本生殖心理学会認定心理カウンセラー 1名、日本看護協会不妊症看護認定看護師 1名、日本生殖医学会生殖医療コーディネーター 1名 など、複数の資格を持つ方も含めていますが、多数の認定有資格者が勤務されています。

特記すべきことは、何と云っても、充実した研究スタッフによる研究業績です。日本生殖内分泌学会（2018年、学術奨励賞。2019年、学術奨励賞論文）、日本受精着床学会（2003年、2014年、2017年、世界体外受精会議記念賞）、日本産科婦人科学会、日本生殖免疫学会、日本（哺乳動物）卵子学会（2004年、2009年、2010年、2014年、学術奨励賞。2013年、論文部門学術奨励賞）、日本生殖心理（医療心理カウンセリング）学会（2006年、2009年、2011年、2018年、優秀演題賞）、生殖バイオロジー東京シンポジウム（2017年、2019年、学術奨励賞）、そして海外では、アメリカ生殖医学会（ASRM、2008年、Third prize poster award）、ヨーロッパ生殖医学会（ESHRE）、卵巣に関する国際カンファレンス（2012年、Poster award）、環太平洋不妊学会（2013年、Poster award）、世界生殖医学会、世界 IVF 学会などに、多数の演題を研究スタッフに発表させて、数々の優秀研究賞を獲得されていることです。私はこのような研究実績のある産婦人科クリニックを他に知りません。

研究スタッフの充実、卵管液の組成の研究に、そして扶桑薬品工業株式会社との共同開発による新しい胚培養液「HiGROW OVIT」の開発・研究にも成果を残し、現在もっともよく用いられている胚培養液と聞いています。

先生は多くの学会で役員を担当していますが、特に、日本受精着床学会では、現在も常任理事として活躍しています。特に、思い出に残るのは、先生が学会長を務められた第31回日本受精着床学会総会・学術講演会（2013年8月8日～9日、別府市）です。学会参加者は、1,000名を越す盛会でしたが、それは熟考された学会プログラム・講演内容の充実がありました。

また、コロナ感染症の流行のため中止せざるを得なかったこの3年間を除き、2019年まで毎年開催されてきた『医療法人 セントルカ セミナー（開院記念講演会）』には、海外そして国内の生殖医療のトップの研究者を大分の地に特別講演の演者として招請されました。振り返ってみますと、Dr. Brinsden, Dr. Cha, Dr. Pool,



Dr. Gardner, Dr. Boivin, Dr. Keel, Dr. Schalue, Dr. Malter, Dr. Munne', 故 品川 信良 先生、故 鈴木 秋悦 先生、森 崇英 先生、吉村 泰典 先生、田中 温 先生、倉橋 浩樹 先生、有馬 隆博 先生、荒木 康久 先生…。多くの先生方で、もう、書き尽くせません。毎年、ひとつの産婦人科医院主催の講演会に多くの生殖医療の臨床・研究に携われる先生方が、全国から参加されました。そして、私たちの生殖医療のレベルを進歩・向上させていただきました。誰にでもできないことで、先生のアクティビティ、バイタリティーには感心しています。



もうひとつの『人間愛』は、クリスチャンである先生の大きな社会貢献、「別府平和園」の理事長です。親の愛に恵まれない、養育者のいない子供たちへの援助です。多くの子供たちを立派に教育・育成させて、社会へ送り出されています。

それから、『医療法人 セント・ルカ』は、現在、大分大学医学部の臨床実習施設に指定され、若い医学生への医学教育を担当し、忙しい中に指導に余念がありません。先生は私の同窓で、8年後輩です。長い間、共に、生殖内分泌学を専門とし研究してきた、私の自慢の親友です。

この30年間、先生は不妊に悩む患者さんへの診療を第一に、学会活動、社会活動、そして院内の人事、対応、ことに、医療部門の医師、看護師、公認心理師、研究室・培養室の方々や事務部門、厨房と、大所帯を牽引されてきました。そして、『医療法人 セント・ルカ セント・ルカ産婦人科 セント・ルカ生殖医療研究所』を、我が国で屈指の不妊治療専門クリニック、生殖医療研究所に成長させて来られました。これまでのご活躍・発展に敬服の言葉しかありません。

もうひとつ忘れてならないことは、先生の懸命の努力に寄り添い、和をもってまとめて来られた富美子奥様の大きな存在です。奥様に感謝と大きな拍手です。

宇津宮 隆史 先生の『医療法人 セント・ルカ セント・ルカ産婦人科、セント・ルカ生殖医療研究所の御開院30周年』に心からお祝い申し上げます。これからも、先生の好きな言葉「常に前を向いて、前進を…」とともに、ベストドクターとして、さらに発展されますことを期待しています。

(令和4年 神無月、吉日 親友 宇津宮 隆史先生へ)



セントマザー産婦人科医院 院長

田中 温

セント・ルカ産婦人科30周年によせて

開院30周年おめでとうございます。もう30年ですか、あっという間だったような気がしますね。先生とも長い付き合いで、僕が平成2年に越谷から戻った際に、兄から当時の温研の教授であった和氣徳夫教授に挨拶に行くようにと言われておりました。和氣徳夫教授はうちの兄のNIHの後任だったそうです。挨拶に行った折、有馬隆博先生（情報遺伝学教授）と角沖久夫先生（元 別府医療センター）、加藤聖子先生（九州大学医学研究院教授）にお会いできました。

先生のお名前は越谷に居た頃から既に知っておりました。門田教授のもとで多嚢胞性卵巣症候群の腹腔鏡などホルモンのことをよくやっておられたことを論文で拝見しており、九州でもやっているんだと嬉しく思っていました。その後私が九州に戻った後、大分県立病院に移られ、その後開業され、それ以来の長い付き合いが始まりました。

セント・ルカ主催のセミナーは毎年ほとんど参加させていただきましたが当時は個人のクリニックでのセミナー開催は珍しく、新鮮な内容が多いためになりました。セミナーで使用する会議室に大きな本棚があり、そこにびっしり本が並んでおり、彼は相当な読書家だなと感心しました。朴訥に大分弁で大いに話され、その内容は広範囲にわたり含蓄のあることが多く、見かけによらない医者もいるのだなとも感じていました。

彼と特に親しくなったのはJISARTの執行部を組んだ際です。まだJISARTができたばかりで色々な問題が沢山あったなかで一緒に舵取りをしていくなかで彼の人となりがよく分かるようになったと思います。その時の印象は現在とほとんど変わっていません。最初はセント・ルカ医院という名前をつけた理由がよく分からなかったのですが、今では先生の精神的支えはキリスト教（プロテスタント）なんだということがよく分かります。その支えを生殖医療における活動方針を決める際の診断基準としてされている方は恐らく少ないのではないのでしょうか。この考え方がすべての治療方針、研究内容のもととなっているように推察できます。特にARTで産まれた児の予後調査、誰もがやりたくないこの仕事を先生が一手に引き受け、スタッフの多大な労力をつかって今日まで続けてこられているこの仕事は世界的に評価されることでしょう。先生ならではの根気と患者への思いが支えているのでしょう。本当に素晴らしい医者で、とても自分は及ばないと感服しております。

60歳のときですか、病院を急に变えて第二のセント・ルカ医院を始めた時は大変驚きましたが順調に患者様も増え、全く心配ない状態です。それはきっと奥様とお嬢様お二人が産婦人科であるということが非常に大きかったのではないのでしょうか。お二人とも産婦人科医で跡を取ってくださっているということも先生の行動範囲を広く継続させることの一つになっているのでしょう。羨ましい限りです。70歳を過ぎますとそれぞれ自分の進む道を選ぶ時期になると思います。JISARTも時代とともに大きく変わってきているように思います。その中で先生はいつも同じスタンスで活動されていることは安心材料です。

私は宇津宮先生を信頼、尊敬できる同志だと思っています。今後ともお付き合いの程をよろしくお願い致します。この度の開院30周年、心よりお祝いを申し上げます。



大分大学医学部 産科婦人科学講座
特任教授・名誉教授

榎原 久司

セント・ルカ産婦人科30周年に寄せて

セント・ルカ産婦人科30周年、誠におめでとうございます。貴院は、大分県のみならず、九州及び全国の高度生殖補助医療（ART）において、ART 保険診療適用開始後、間もない現状の中、多くの意味で、益々重要な立ち位置となっているのは確実です。

この30年間、貴院の診療・研究とともに、私ども大分大学医学部 産科婦人科学教室は歩ませていただきました。また、その間、多くのご指導と元気をいただきました。いつも感銘を受けていること、それは、セント・ルカ産婦人科の院長先生を始め、皆様の情熱とアクティビティの高さです。毎年、セント・ルカセミナーでは、碩学の大家とともに新進気鋭の研究者を呼ばれ、大分に居ながらにして本当に貴重な講演を聴けるという幸せをいつも感謝しております。新しいトレンドへの院長先生の嗅覚に、いつも感嘆しています。

晩婚化や晩産化により、不妊治療を受ける患者さんが急激に高齢化してきました。この高齢化は、患者さん側にとっても、医療者側から見ても、妊娠しにくくなるばかりでなく、様々な問題が生じ、益々深い配慮が必要な状況になりつつあります。貴院は、これらの問題に非常に視野の広いスタンスで当初から取り組んできました。生殖年齢としては高齢の方達をいかに妊娠に導くかなど、きめの細かい不妊治療・ART を行い、すばらしい治療成績を挙げておられます。

院長先生の大きな功績の1つは、早くから保険適用・助成金について署名運動を展開し、国会請願を行い、まずは不妊治療への助成に大きな役割を果たし、さらには保険適用が実現したことです。経済的な負担が少しでも軽くなることで、これからも、どれほど多くの患者さんが心身ともにつらい治療を乗り越えられることでしょう。これ以前にも、大分県からの支援の改定に際し尽力され、全国でも最高額に相当する助成を得て、患者様の福音となりました。また、先生は生殖補助医療で生まれた子の心身の健康に対して高い問題意識をお持ちであります。さらに先生は、AIDなどで出生された児の出自を知る権利やその後の心のケアに深い関心を持つなど、今後も、社会貢献を果たされることと拝察いたします。

思いつくままに30周年のお祝いに寄稿させていただきました。セント・ルカ産婦人科にはこの紙面にてまったく言い尽くせぬほどすばらしい面がたくさんあります。今後も、院長先生を中心として、「医療の安全性、確実性、正確性を保障し、患者さんも、またその子供も安心して医療を受けられる環境が整うこと」を不断に目指されることでしょう。「患者さんとその医療・技術で生まれてくる子の本当の幸せ」を目的とした治療やご配慮を完遂なされることを心からお祈りして、私からのお祝いの拙文とさせていただきます。



大分大学医学部産科婦人科
診療教授

河野 康志

セント・ルカ産婦人科30周年によせて

この度はセント・ルカ産婦人科の開院30周年を心よりお慶び申し上げます。

セント・ルカ産婦人科は1992年に大分県で唯一の不妊症専門病院として開院しました。当時は生殖補助医療の黎明期であり、現在に至るまでのご発展は院長である宇津宮隆史先生のすばらしいビジョンあってのことと思っております。

セント・ルカ産婦人科の診療の特徴のひとつに腹腔鏡下手術があります。現在、腹腔鏡下手術は日本全国に広く普及しておりますが、当時は行う施設も限定されておりました。宇津宮先生は数多くの手術症例を経験しており、不妊症治療への導入は迅速な原因の究明に役立ち、妊娠につながる画期的な方法です。また、生殖年齢における高齢女性や習慣流産症例への妊娠への道筋として受精卵の着床前診断 (PGT-A) を全国に先駆けて行ってこられました。日本産科婦人科学会の臨床研究にも参加し、この分野でのトップランナーであります。がん患者様の妊孕性温存にも早くに注目し、大分県のがん生殖医療ネットワークを組織し、我々を引っ張っていただいております。

学術的活動も積極的に行われ、国内の学会はもとより、海外のESHREやASRM、そして学術論文を通じて目覚ましい研究成果を発表され、数多くの学会賞を受賞しておられます。当講座にも大学院生として人材を提供していただき、論文の執筆や学術奨励賞の受賞など多くの研究成果を上げてくれました。さらに特筆すべきことは、人材育成の面におきまして多数の博士号取得者を輩出していることや、日本卵子学会が認定する複数の生殖補助医療管理胚培養士を養成していることです。これは、本邦における同様の施設を比較しても稀有な存在であるといえます。

宇津宮先生は学術だけでなく社会貢献も積極的に行ってこられました。毎年、初夏に開催されるセント・ルカセミナーでは国内外の著名な先生方を招聘し、最新の話題を拝聴し、交流する機会を作ってくださいました。私も本セミナーで幾度にわたり座長に指名されましたが、大変光栄なことと思っております。この数年間はCOVID-19感染症拡大でセミナー自体が休止となりましたが、再開していただけること期待しております。また、2013年には別府市で日本受精着床学会を開催され、第三者提供配偶子の生殖医療の課題の解決に向けて問題提起し、現在の法整備等にも繋がっております。宇津宮先生の生殖医療に関する先見の明には感服するかぎりです。

今年度からは生殖補助医療の保険診療化に伴い、生殖医療を提供する形が変化しています。今後も日本の生殖医療に多大なる貢献を続けていくとともに、社会の多様なニーズにこたえるような施設であり続けるセント・ルカ産婦人科の益々のご発展を祈念申し上げます。



日本福音ルーテル大分・別府・日田教会 牧師

野村 陽一

セント・ルカ産婦人科30周年に寄せて

開院30周年おめでとうございます。不妊治療一筋にこの30年を過ごされたことに、心から敬服いたします。

私がセント・ルカ産婦人科と関わりを持つようになったのは、2004年のこと、宇津宮院長から、毎月1回、ミーティングで職員向けに聖書の話をお願いされたのが始まりでした。その後2005年10月には、院内倫理委員会が設置されることになり、倫理委員を委託され、倫理委員長を務めることになりました。のちに倫理委員長は別の方に代わっていただきましたが、これまで18年間、セント・ルカ産婦人科とは、このようなかたちでお付き合いさせていただきました。

医療従事者に向けて、聖書の話をするのは初めての経験でした。それまで、保育所職員や社会福祉施設職員に対する経験がありましたので、その延長線のような形で進めることにしました。初めに、聖書の持つ人間観を取り上げ、旧約聖書の創世記を中心にお話ししました。中でも天地創造の記事が重要で、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」(創世記1:31)という記述が、聖書の人間観の肝と言っていいでしょう。人を批判的に見ないことをお伝えしたかったのです。

不妊治療の現場ですから、聖書で不妊に言及されている箇所も取り上げました。意外にも、聖書では複数の箇所でも不妊に言及されているのです。人物名を上げますと、アブラハムの妻サラ、ヤコブの妻ラケル、サムエルの母ハンナ、洗礼者ヨハネの母エリサベトといった人々が代表例です。家名存続を重要視する民族性や、子孫の存在が神の祝福の現われであるとの信仰が背後にあるのかもしれない。

そのほか、聖書の名所めぐりも致しましたが、毎回、私が楽しみにしていたのは、職員の皆さんの感想を聞くことでした。教会の信徒の反応や感想とはまったく異なり、ご自分の生活に根差したとても新鮮に感じられるものであったからで、教えられることも多々ありました。その点で、皆さんに感謝しなければなりません。

さて、倫理委員を引き受けたものの、不妊治療は先端医療ですから、これは大変なことになったと深く考えざるを得ませんでした。おそらく、不妊治療の現場で倫理委員を務めている牧師や神父は、この日本ではだれもいないでしょうから、自分一人でキリスト教界を背負っているような重い責任を感じたのです。それで、日本福音ルーテル教会のトップである当時の総会議長に倫理委員を引き受けたことを報告しました。しかし、報告を受けた側は、これがどれほど重要なことであるか、どうも受け止めきれなかったようです。

私は不妊治療の不の字も知らない、まったくの門外漢でしたから、不妊治療の何たるかを少しでも知らなければなりません。聖書の学びでは、話を終えた後、職員ミーティングに同席させていただき、専門用語が飛び交っても意味も分からないまま、ただ聞き流しているだけでよかったのですが、今後はそういうわけにはいきません。最低の知識でも身に着けておこうと思い、教会の総会で上京した際、新宿の紀伊国屋書店で不妊治療

の入門書や解説本を入手し、備えとしました。後になって気づいたのですが、入手した一冊は何と森崇英先生のご著作でした。

院内の倫理委員会とはいえ、審査する事柄は、一組のご夫婦の人生を左右するものであり、軽々に審査できるものは一つとしてありませんし、強い倫理観をもって臨まなくてはなりません。宇津宮院長とは時に意見がぶつかることもあり、院長いわく「うちの倫理委員会は厳しい」との声も上がりました。そういう倫理委員会で難題だったのは、まだ方向性も指針もない頃の着床前診断の審査でした。ある時は、一医療機関の倫理委員会で審査する困難さと限界に直面し、産科婦人科学会に上申書を提出したこともありました。着床前診断については、現状、産科婦人科学会から方針やマニュアルが示され、院内倫理委員会の負担は軽減されています。

不妊治療に高い倫理性は欠かせない所ですが、近年、倫理無視、産科婦人科学会の方針無視の、商業的不妊治療が横行していることを耳にし、大変残念に思います。欲望の行きつくところは必ず幸いになるとは言えないのですが…。

セント・ルカ産婦人科が、これからも地域の人々の悩みに心を寄せ、幸いをもたらす医療機関であり続けま
すよう、また不妊治療のますますの研究発展にまい進されますよう、心から願っています。この三年ほど、新
型コロナ感染防止のため、聖書の学びはお休み状態です。一日も早く再開できる日が来ますように。



三俣山より 大船山



社会福祉法人 児童養護施設別府平和園 施設長
高山 英明

セント・ルカ産婦人科30周年誌によせて

開院30周年を迎えられたことにお喜び申し上げます。

宇津宮院長は、平成10年から当法人の理事を務め、平成22年から理事長として別府平和園の運営にご尽力いただいております。

別府平和園には、現在35名の児童が職員34名と共に暮らす児童養護施設ですが、課題も多く、平成28年の「児童福祉法改正」に伴い、「大分県社会的養育推進計画」では社会的養護の環境は大きな転換期を迎え、施設の高機能化及び多機能化・機能転換等を図ることが求められ、更に専門性を高めていくことが期待されています。

そのような状況で当施設は、大分県で唯一の児童養護施設単体の社会福祉法人であり、今後の施設運営等で悩むことも多く、多忙な宇津宮理事長に相談に行くことも多く、その度に的確な指示や時には職員への激励を頂き、大きな心の支えになっています。

今後も宇津宮理事長と共に、初代施設長「モード・パウラス女史」の教え「この最も小さい者の1人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」に従い、子どもたちの最善の利益と幸せのため、職員一同努力していきたいと思っています。

